

(声を読む) あとがき

『失われた時を求めて』を読んだのは一九六七年の六月から十一月にかけてのほぼ半年。フランスに学生として滞在していたときだった。八冊本のガリマール文庫本で読んだのは正解だったかもしれない。当時三冊に分冊されていた辞書のようなプレイヤード版ではおそらく早いうちに投げ出していただろう。どんな本でも最初は急な登攀のようなものだが、プルーストの作品はとくにそうで、おぼろげに内容が見えてくるようになるのは少なくとも、苦しい最初の数十ページを、息をとめるようにして耐えなくてはならない。それをすぎるころになると、不眠に悩む親が、添い寝している子の安らかな寝息に引き込まれて眠ってしまうように、プルーストの文章の希有なリズムに引き込まれてしまうのである。最初は一日五ページと決めていたが、十一月上旬の読み終える頃には一日五十ページは楽に読めるようになっていた。後半では少なくなった残りを読み終えるのが惜しくなった覚えがある。この作品についてはその後、大学の講義などで話したことがあるので、引用に用いたポケット版はぼろぼろになったが、なんの目的もなくひたすら最初から最後まで通読したのはこの一回だけである。こういう時間を持てたことは幸せなことだった。

フランス憲法に、「フランス共和国の言語はフランス語である」という文言があるのは、フランスの版図には古くからフランス語以外のさまざまな言語が用いられていたからである。「フランス語」と一口に言うが、日本語の形成と違い、この言語はある特定の地域の方言が四百年以上前から意図的に彫琢純化された結果である。こうしてフランス語圏と言うべきものが国を越えて形成されるようになった。アルジェリア生まれのカミュのフランス語は学校で習ったフランス語が基本になっているし、デリダも同様である。フランス人とは何か、という問いには「フランス語をしゃべる人間」というのが現在のフランス人のふつうの感覚である。彼らのフランス語にたいする感覚は日本人の日本語にたいする実感とかなり違う。

文語的文章まで含めると、現在フランス語と呼ばれる言語はいくつかの種類にわかれる。ルモンド紙の文章を読めないフランス人は少なくないし、また外国の学校でフランス語を習った人の多くは、隠語的表現の多い政治タブロイド紙のカナール・アンシェネを理解できない。階層の違いによるフランス語の違いもはなはだしい。「産着」langes という語の意味がわからず、「拘束着」と理解した若い母親が、赤ん坊を育てる能力に欠けると判断されて赤ん坊を保護司に

取り上げられる事件もあった。

プルーストの文章の面白さはこうした多様なフランス語を背景にしていることに関係している。私が読み始めたのは、こうしたフランス人のいろいろな場面でのフランス語（プルーストの時代とは若干違ってきているが）に日常的に接している時期であった。さまざまなフランス語の音が自然に耳に入る環境でなかったら、この読書は難しかったに違いない。

この作品はこのような意味で、フランス語の声の、テキスト化されたものである。文字という確固とした保証があったからこそ、地名学的テーマ、言語学的テーマ、お互い脈絡のないような様々なエピソードが可能であり、また小説の筋とは関係しないことばの遊びが可能だった。文字がないホメーロス時代ではこうはいかなかったろう。『失われた時』の長さは暗記口承が不可能というわけではないだろうが、内容は文字以外では定着できないものだ。しかしこの小説を読むときは声をイメージしながら読まなければならない。ドゥルーズが言うように、この小説の追及テーマは時間でも、記憶でもなく「真実」である。人の真実の解明は人の語りの内容よりもむしろ、声と表情と話し方とによる。

ホメーロスの二作品全部を読み終える予定で輪読会を始めて二十七年目。今年の十二月で読了である。こうして「声のテキスト」としてのホメーロスに親しんでいるうちに、プルーストの『失われた時を求めて』の読み方が大きく変わった。「声とテキスト」という今回の新潟大学のテーマは、三千年近く隔たった二つの作品を結ぶのにもっともふさわしいテーマであった。

『イーリアス』を、輪読会で読み始めたのが一九八三年の四月。輪読会という形になったのは、初め声で伝えられていたこの作品は、声を出して朗読する必要があると思ったことと、一人では到底長続きしないと考えたからだ。最初は十五行の予習に二三日かかり、一週間に一回でもたいへんな難行であった。メンバーはこれまでずいぶん変わったが、最初からの参加者は国文学者の満田郁夫（彼が主宰者であった）と私である。フランスの J.P ルヴェ教授の弟子、野津寛（現・信州大学準教授）には長く輪読講師をつとめてもらった。精神科医の小尾いね子、京大のサンスクリット学者徳永宗雄、東大の竹内信夫、『失われた時を求めて』とホメーロス作品を原文で読破した日本では希有な俳人生田康夫、ギリシャ語の詠唱の抜群に上手な早稲田大学学生加藤雄一君、ほか多くの参加者があり有益かつ貴重な教えを頂戴した。感謝したい。